

2025年5月11日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教36 「キリストによって生きる」

ヨエル2：26～27、ヨハネ6：52～59

今日与えられた52節以下は、ヨハネ福音書を書きました教会が、その聖餐の重要性を説くために書いたとする解釈があります。このヨハネ福音書が成立していく時代に、グノーシス主義という思想が影響を持ち始めます。これは教会にとって大きな脅威となりました。もともとグノーシスというのは「知識」という意味で、神さまへの真の知識を得ることが救いであると説きました。またグノーシス主義では、善と惡、靈と肉というようにすべてを二元論的に考えて、この世は惡であって、この世の事柄はすべて否定されていきます。当然、肉体を使って生きる生活も否定されます。それゆえ救いは、この世と切り離され、精神化されていきました。イエスさまの受肉は否定され、イエスさまの肉体は仮の姿であった、本当に人間になられたのではないという考え方が生まれてきます。

そうなりますとわたしたちの救いは根本から崩れてしまいます。イエスさまの受肉から十字架の死、身体のよみがえり、昇天に至る一連の救いの出来事がまったく意味をなさなくなってしまうのです。福音書の冒頭に「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」（1：14）とありました。まことの神さまがまことの人となられ、わたしたちの罪を担われ、そしてよみがえりと昇天によって、罪に勝利され、わたしたちの存在を天、神さまの御国に引き上げ、つなぎとめてくださいました。それゆえにわたしたちはこの地上においても、神さまの栄光を現して生きることができます。教会はその救いを語ります。そしてその救いを見る形で表すのが聖餐なのです。聖餐においてわたしたちは、この神さまの救いを確かめ、自分のものとします。聖餐に与ると、わたしたちはこの体が罪に死に、神さまのご支配の中に生きていることを確信するのです。

長老の任職式をしましたが、式文の中にこういう言葉ありました。「あなたの信仰を行いのない信仰となさず、あなたの祈りをむなしい言葉としてはなりません」（全国連合長老会） 信仰は行きを伴うものです。実際に肉体を使って生きるわたしたちの生活の中に及ぶのです。けれども救いを単なる精神世界の話にしてしまうと心の安定とか、気分の問題になってしまいます。どうも日本のキリスト教は、そういう傾向があります。信仰と生活の分離、それこそ二元論です。

東神大でも長く教理史、教会史の教授として教えられた赤木善光先生が『聖餐論』という本の中で「泥臭いキリスト教」ということを書いています。本来、キリスト教はもっと泥臭く、生活感のある生々しさを持っていた。けれどもそれがいつの間にかインテリ受けする、お上品なものになってしまったという批判が書かれています。確かにそういう面は否定できません。明治時代に日本にプロテstantが入ってきますと禁酒禁煙などの運動とも相まって、倫理的高潔さ、清らかなイメージが定着してしまう。また教育に力を入れますので、学識高い印象があるのでしょう。でもその点、カトリックは民衆の中に浸透していきました。天草はキリストの信仰が根付いています。普通に地元の漁師さんたちが日曜日には崎津の教会に行き、毎日マリア像に手を合わせ、主の祈りを祈る。そういう素朴な信仰に感銘を受けたことがあります。

何が違うのでしょうか。これは歴史的にも神学的にも検証していく必要があると思います。一つには聖餐ではないかと思います。プロテstantは説教、御言葉を中心とします。説教中心だ

とやはり神学とか教理が前面に出てしまい、それが知識層に受け入れられていく傾向があります。けれどもカトリックはミサ中心です。難しいことは言わない。パンに与る。それがわたしを生かす命だと素朴に信じる。その素朴さが重要ではないでしょうか。

今日のところには「肉」(サルクス)という言葉が繰り返されます。「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない」(53節)これまで「わたしは命のパンである」(6:48)というように「パン」となっていた言葉が「肉」に置き換わります。これはこの福音書が最初に語りました主題「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」(1:14)にわたしたちを引き戻していると理解できます。神さまが、肉(サルクス)これはわたしたちの文字通り肉体、病気をしたり、怪我をして痛みを感じる肉体をお取りになられた。まことの神さまがこの肉においてわたしたちと深く出会われるのです。

どこで神さまと出会うのか。もちろん礼拝で御言葉に与る時に神さまと深く出会うでしょう。でも福音書はそれだけに限定しません。わたしたちが汗を垂らして働くその肉体において、病を得て苦しむ肉体において、年老いて自由が利かなくなるその肉体において、そこでも神さまはわたしたちと出会ってくださる。そのために神さまは御自身を低めてくださった。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました」(フィリピ2:6~7)イエスさまによってわたしたちの体を使って生きる生活は決して卑しいものではなく神さまと出会う場所になりました。それだけ尊いものとされたのです。神さまと出会い、自らの体を通して神さまの御業を表す、そういう器へと変えられていきました。これが救いです。

その恵みをいつも覚るために、わたしたちは聖餐に与り続けるのです。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる」(56節)イエスさまがわたしの内におられ、わたしもイエスさまの内にいる。これは頭でいくら考えても理解できないことです。神秘、秘義とも言うべきことでしょう。でも教会はそこにわたしたちの命があると本気で信じてきました。

洗礼を受けることでわたしたちはイエスさまと一つになります。そして聖餐によってイエスさまと一つであることを何度も何度もこの生涯を通して確かめていきます。「わたしを食べる者もわたしによって生きる」(57節)わたしたちは頭だけで、知識だけでイエスさまを知っているではありません。信仰とは、イエスさまと一つにされ、イエスさまが内側からわたしたちを生かすという体験なのです。

天の父よ。あなたはまことの神さまでありながらも、自らを低めて、わたしたちのところにきてくださいました。そしてこれをご自身のものとされました。まことの人となられた。それだけこの卑しい体を重んじてくださったのです。どうぞ聖餐に与る時、このわたしの中にイエスさまが生きておられることを信じさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。